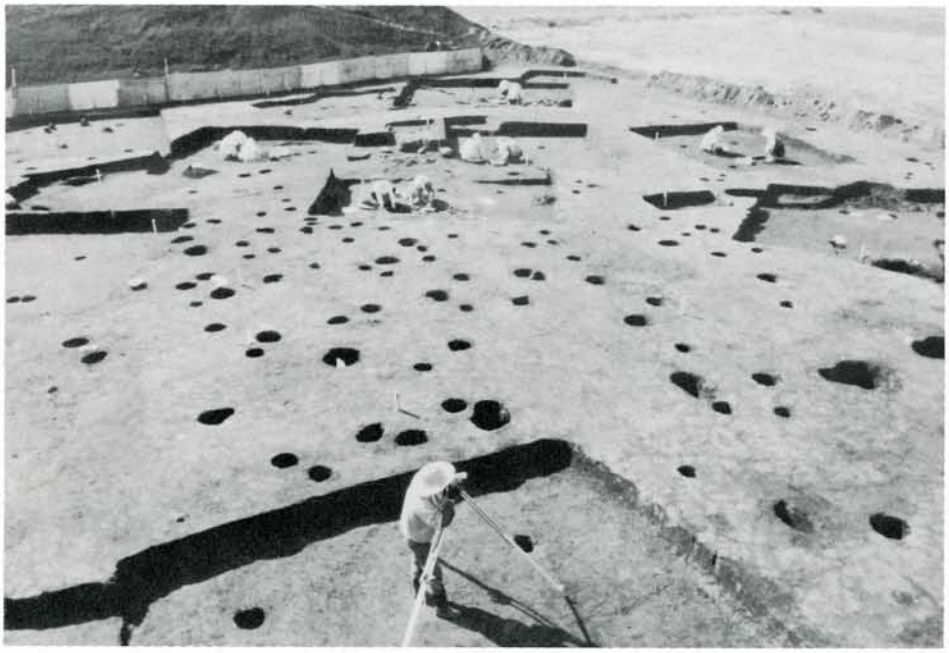
新富町文化財調査報告書第６集

北原牧地区遺跡

（蔵園遺跡・上園遺跡）

県営農村基盤総合パイロット事業（尾鈴二期地区
北原牧工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告



１９８７・３

宮崎県新富町教育委員会

序

新富町教育委員会は、県営農村基盤総合パイロット事業北原牧工区の事業に伴い、宮崎県の委託を受け、事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその概要報告です。

本調査の中、古墳時代中期の本格的な集落跡が出現し、県下でも数少ない古墳時代の生活跡として貴重な調査となりました。また、蔵園遺跡においては、地下式横穴墓の北限地に新たに一基を加え、本基制の北限地についての地歩を固める調査となりました。

調査は、宮崎県教育委員会をはじめ、国立奈良文化財研究所の西村　康氏、鹿児島大学考古学教室の協力によって行ったものです。

また、発掘調査に際しましては、県一ッ瀬土地改良事業所及び一ッ瀬土地改良区にあわせ、地主及び耕作者をはじめとする地元の方々の御理解と御協力をいただき心から御礼申し上げます。

昭和61年 3月

新富町教育委員会

教育長　小　田　幸　一

例　言

1. 本書は、北原牧地区の県営農村基盤総合パイロット事業に伴い、昭和61年度に実施した北原牧地区遺跡（上園・蔵園遺跡）の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、新富町教育委員会が主体となり、有田が担当し、県立総合博物館、石川悦雄氏、県文化課、北郷泰通氏に指導をあおいだ。
3. 本書に使用した図の作成及び製図は、有田があたった。
4. 本図に使用した方位は真北を使用し、磁北については注記を行った。
5. 本書の執筆、編集は有田が行った。

目　次

北原牧地区遺跡

1. 調査に至る経過…… 1
2. 遺跡の立地と環境…… 2
3. 調査の方法と概要

蔵園遺跡…… 3

上園遺跡…… 4

4. ま と め…… 6

北原牧地区遺跡

1　調査に至る経過

昭和61年から昭和63年にかけて、北原牧地区において県営農地基盤総合パイロット事業が計画された。事業地内には、昭和56年度遺跡詳細分布調査等により、西牧遺跡・北原牧遺跡・通山遺跡・上園遺跡・蔵園遺跡・木戸口遺跡・一ツ塚遺跡の散布地が確認されており、また、県指定史跡富田古墳の一部も含まれ、新富町大字日置三納代地区における遺跡の集中地点であることが知られてきている。これに併せて県教育委員会は、８月試掘調査を行っており、西牧遺跡周辺の遺跡確認をし、旧石器、縄文早期（集石遺構）、弥生時代の遺物が採集されている。

61年12月、事業地内に存在する埋蔵文化財について、宮崎県一ツ瀬土地改良事業所、一ツ瀬土地改良区、県文化課、町教育委員会の間で協議が行われ、事業地内の埋蔵文化財の保護と開発の間に調整が行われて、現状保存が困難な道路及び水路及び削平を必要とする部分については、記録保存の措置をとることとなった。

本年度の調査は、新富町教育委員会が主体となり、有田が担当して行った。

調査の結果、上園遺跡においては、古墳時代の集落跡が確認され、また蔵骨器及び石鍋等、注目される遺構、遺物が確認された。また蔵園遺跡においては、昭和58年度調査された蔵園地

第１図　遺跡周辺位置図

下式横穴墓に新たに一基の平入地下式横穴墓が確認された。

調査は、昭和61年11月6日から昭和62年2月24日まで実施した。

2　遺跡の立地と環境

新富町は宮崎市の北約20kmにあり、その町域は一ッ瀬川北岸の沖積平野と野地・原などと呼ばれる洪積大地に占められている。この洪積台地は、広く宮崎平野に広がるもので平担面の顕著な段丘地形となっており、その代表的なものに標高120m級の茶臼原面、90m級の三財原面、70m級の新田原面がある。

北原牧地区遺跡は新富町大字三納代と日置の大字界となる台地で通称"北原牧"に所在し、北に日置川、南には鬼付女川により開析された標高70m内外の新田原面に立地する。

また、北原牧地区周辺には、北東700m、日置川対岸に古墳時代の小集落である藤掛遺跡があり、住居跡と溝状遺構が検出されている。この台地の南東端にあたる、あぶみの丘陵からは、昭和56年調査された鐙遺跡があり、弥生時代中期の住居跡が6軒確認されており、また、茸石を2条めぐらした鐙古墳は、5世紀に比定されている。それに続く沖積平野に残る砂丘に立地する園田遺跡があり、弥生時代～古墳時代の住居跡が確認されている。また、この台地南側の鬼付女川右岸の河岸段丘には、弥生時代終末期と考えられる奥遺跡がある。

3　調査の方法と概要

蔵園遺跡

調査区の設定は、蔵園については、地下レーダー探査法により、地下式横穴分布の可能性がある地点を抽出し、域内に所在する指定古墳についても周溝の確認を行った結果削平された円墳の周溝と考えられる一部と地下式横穴墓２基が予想された。

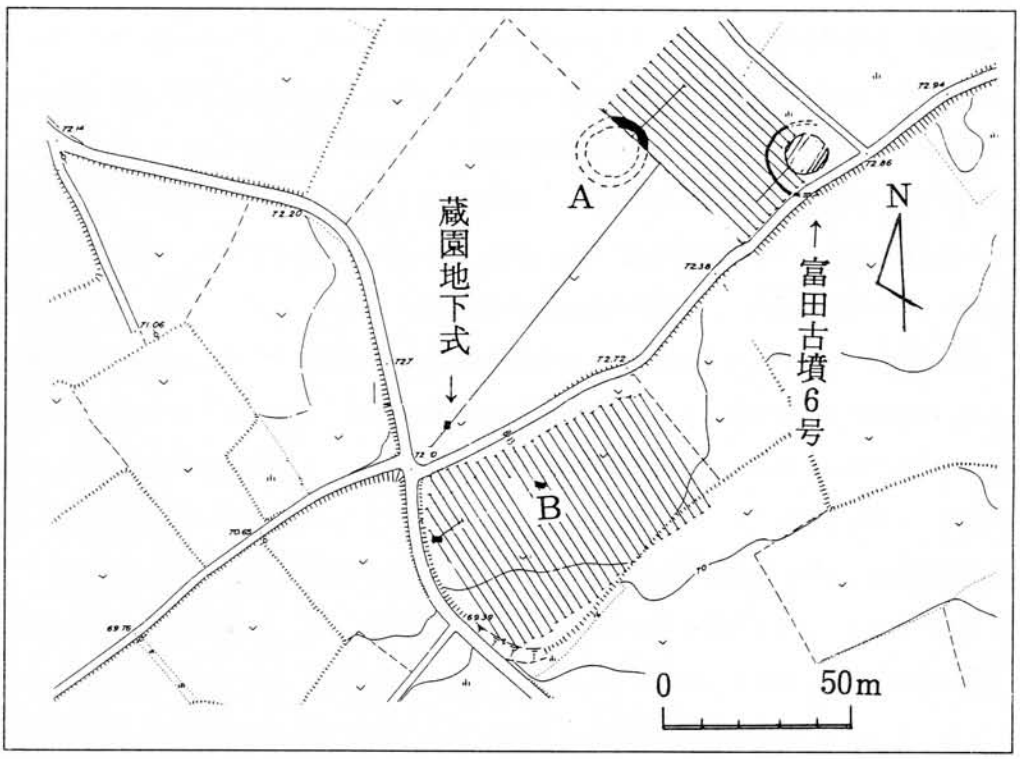
この結果にもとずき、削平されたと思われる周溝の一部と地下式横穴墓１基の調査を行った。その他については、次年度の調査に譲った。

尚、当地の基本土層は、第Ⅰ層表土・耕作土、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層暗褐色ローム（含小白斑）第Ⅴ黒褐色ローム、Ⅵ層褐色ローム、Ⅶ層明褐色ロームであり、近年の大型農業機械による深耕のため、第Ⅳ～Ⅴ層まで攪乱が行われ耕土と化した部分がある。

Ａ　この遺跡からは、削平された円墳１基の周溝の一部が検出された。遺構は円墳の東側周溝にあたるものと考えられ、巾約1.80m、深さ30～40cm、復元周溝径は、約20mと考えられる。

出土遺物は、周溝内より須恵器壺の細片と、土師器の細片が検出されたのみである。

Ｂ　地下式横穴墓については、地下レーダー探査による空洞反応の強い部分を地下式横穴墓の主体部として、また、先に古墳周溝の反応に似た部分を竪穴部との想定で掘下げたところ、



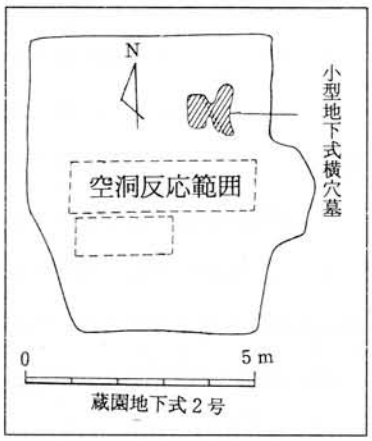
第２図　蔵園遺跡遺構位置図

主体部天井部に耕土が落ちこんだ小型の地下式古墳そのものが確認された。なお、空洞反応が一番強く反応した部分は、地表から約150cmの部分に下位30cm、最高位20～25cmのドーム状の空間であり、人為的な所作とも考えられず自然空洞の可能性が高い。

遺物はなし、僅かに主体部中位より、ベニガラ状の赤色顔料が認められたのみである。

尚、この地点については、耕作との関連もあり現状のまま保存を行った。再調査の必要がある。

上 園 遺 跡



この遺跡は，昭和56年遺跡詳細分布調査によって確認された遺跡で，かなり広い範囲に渡って土器片が散布していた。

遺跡は，台地中央部最高位の標高72mから北側にかけて広がり，このうちの東側では戦後しばらくは，径10m近い円墳があったということで，それにともなうと思われる須恵器片が，土手に残っていた。今回調査した地区は，この台地北側で深耕等により，土師器片，須恵器片が特に多く表採された地区である。

調査は，畑地の収穫にあわせ，A区→B区→C区と順次行った。このうち一部については，排土置場のため未発掘区がある。ABC区の調査区と南側にある畑地とは，約80cmの段差があり，調査区自体，東側および北側を通る農道に囲まれ，ほぼ平坦化されていたが，表土を剝いだ段階では，北側に赤ホヤ層が比較的厚く，南側は赤ホヤ層が，カットされており，全体として北側に緩く傾斜した旧地形が確認された。また，一段高い南西側D区については，確認のため耕作土のみの除去を行い，約10軒の住居跡が確認されている。

調査の結果，A・C区から住居跡45，蔵骨器埋納拡１，溝状遺構７，堀立柱建物２，方形土拡２，円形竪穴３，その他ピットが多数検出された。住居跡は，ほぼ方形プランの竪穴式で，6.9×6.6mの61号住を最大とし，１辺約5.0mが平均的規模で，１辺3.0m内外も含んでいる。柱穴は，一部未検出を含めてそのほとんどが四本主柱であり，その中央部には，僅かに窪んだ焼土部分があるもの，土師器甕を埋設し，そのまわりに焼土が認められるものの，屋内カマドと思われる焼土，および粘質土の塊など炉に関する遺構が残っていた。遺物は未整理であるが，61号住からは，勾玉１（石質不明），管玉11（碧玉製）の玉類，小型丸底壺，脚部にふくらみをもつエンタシス状の器形残す高坏，タタキを有し，底部に僅かに平底を残す。胴部最大径を中位よりやや上位におく甕など多数出土しており，その全てが土師器であった。また，３号

第 3 図　上園遺跡遺構図(A・C区)

住からは、口唇部の直立した須恵器坏も出土している。

C－1堀立柱建物は、短軸1間1.3m、長軸1間1.8m×2間、C－2堀立柱建物は、短軸1間2.7m、長軸1間2m×2で遺物は、土師器細片のみであった。土拡については径約1.2m、深さ約1.0mのC－3号円形土拡から、土師器甕・高坏・壺および1～2㎜大の石粒を混入した甕などの生地と思われる粘土塊が出土している。蔵骨器は、16号住埋土除去作業において確認された関係で、上部プランは不明であるが、頸部を欠いた古瀬戸様壺に滑石製石鍋を蓋としたもので、内部に骨片および銅銭が残っていた。B区からは、住居跡（2軒については未堀)、堀立柱建物3、溝状遺構2、短刀1、ヘラ切り底の土師皿をともなった土拡（墓拡)、その他堀立柱建物にともなうと思われるピット群多数が検出されている。住居跡については、A・C区同様で主柱の竪穴式である。堀立柱建物は、1間1.60mとし、2間×3間が2棟、その他があり、この他にピット内遺物の整理が進めば、さらに増加するものと思われる。

4 まとめ

蔵園遺跡は、地下式横穴墓の北限であり、今回新たに類例を加えたことにより、確実に北限地を確固たるものにした。さらに地下式横穴墓の類例の増加の可能性にあわせ、同地区内に所在する富田古墳および滅失古墳の主体部等、墓群の構成に興味ある内容となった。

上園遺跡では、住居跡はすべて方形プランを基調とし、四本主柱の建物と思われる。遺物は未整理の段階であるが、出土した遺物、特に須恵器の年代観から6世紀を中心とした集落跡と考えられ、須恵器をともなわない住居跡とそれらの切り合い関係、出土土師器からさらに5世紀までさかのぼるものと考えられる。住居内の炉の変遷についてもその用途（調理用・暖房など）の問題点を残しながらも時期差をしてとらえられる。

県内では、これまで古墳時代の住居跡として、高鍋町上別府遺跡[注1]、宮崎市浄土江遺跡[注2]、本町の藤掛遺跡[注3]が調査されているが、6世紀を中心とした古墳時代後期の小集落および集落の一部であった。今回調査の60軒というまとまった集落をみても、四本主柱の方形プラン、中央炉のあり方など時期的変遷を含め、ほぼ共通するものがある。日向の平野部の古墳時代住居形態の変遷を知る上で、また今後の調査によって面的な広がりと蔵園遺跡および周辺に所在する、古墳など墓域との関係などから、古墳時代の社会構造の解明に本遺跡は重要な意味をもつものと言えよう。

注1　「上別府遺跡」『お染ケ岡地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　宮崎県教育委員会　1979

注2　「浄土江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書第6集』　宮崎県教育委員会　1981

注3　「藤掛遺跡」　新富町文化財調査報告書第2集　　新富町教育委員会　1983

▲　上園遺跡遺構近景

▲　蔵骨器出土状況

▲　上園遺跡出土土器